

〈翻訳〉

ハンス＝イェルク・ジーヴェルト

ドイツ社会学の研究課題としての フェルアイン (クラブ・組合) (1)

河野 眞 (訳・解説)

(目次)

1. はじめに 287
2. 組合 (フェルアイン) ——ドイツ社会学の鬼子? 290
 - 2-1. 組合組織の成立——組合と社会的分節化過程 292
 - 2-2. 初期の社会学の対象としての組合 297
(マックス・ウェーバーによる
フェルアイン／組合へのコメント) 298-301
 - 2-3. 研究から《消えた》組合 308
訳注 310
解説 (1) 翻訳・紹介にあたって 315
 - 2-4. 1945年以後の組合研究と町村体研究 (以下、次号)
 - 2.4.1. 組合の統合機能
 - 2.4.2. 組合のアイデンティティ機能
 - 2.4.3. 組合の政治的機能
(組合メンバーと一般的な政治参加)
(地方政治家のキャリア形成としての組合活動)
3. 組合——自助努力運動と福祉国家
訳注
解説 (2)

1. はじめに

本研究の目的は、フェルアイン組織 (Verein/Vereinswesen クラブ・組合・社団：以下では組合・の訳語で統一する) が社会学の《テーマ》としてたどった歩みを概観することにある。しかしその試みを行なうには、一つには(社会学の分野に限っても) 飛び石伝いになる他なく、二つには隣接する諸分

野との境界を流動的に解する以外にない。もとより社会学は、そのディシプリンとしての特徴から、特殊なパースペクティブと伝統に依拠している。しかしここでは《ツンフト》にのみ注目が向けられ、それが《組合》のテーマとの取り組みにあたって、現実には影響・発展・共同作業を妨げている。

学問の対象としてのテーマや社会的推移の特定は、学術システムのなかでは自律的に起きるものではなく、社会の変遷と社会的分節化のなかで注目しなければならない。そのさい、《潜在的な》テーマを発見する意味での学問の規定力、また学問研究の固有なダイナミズムがどんな重みをもつかは、これまた議論の余地のないものではなく、むしろ経験的にのみ決まるところがある。たしかに社会的な学知作りの過程は、得るところの多い分析の枠組である。そもそも学問的テーマという水準において対象・問題・推移を取り上げること自体が、すでに集団的な一般化過程に従っている。テーマ設定の過程のための土台として、どこまで有効あるいは使いものになり得るのか、それを測る規準を信じることに、少なからずナイーヴな面がある⁽¹⁾。

学問と社会との間の多彩な絡み合いをスケッチ程度にすませるのは、読者にも筆者にも不満を残すだろう。学問の社会的相関を抽象的に、すなわちそこで具体的には何を解しているか、また材料をもとに何を証明できるかに踏み込まずに語るのは危険でもある。殊に組合組織の分析の場合は、諸概念が(対象もそうだが)変化するものであることが、先ず厄介である。言い換えれば、比較されるものの本質が同じであることを、常に明らかにしなければならない。

組合(フェルアイン)の定義は、内側からの枠付けにおいても外からの境界づけにおいても前提として必要だが、その企図はただちに困難に直面する。政党や労働組合をスポーツ組合や余暇のクラブと一緒にするなら、さらに宗教的な団体や市民運動やそれらの聯合組織をも一聯とみなすな

(1) 『ケルン社会学・社会心理学誌』別巻18にまとめられた諸論考、特に次を参照、Helga NOWOTNY, *Zur gesellschaftlichen Irrelevanz der Sozialwissenschaften*. In: Nico STEHR, René KÖNIG (Hg.), *Wissenschaftssoziologie - Studien und Materialien*. Opladen 1975, S. 445-456. 本研究にさいして、学問としての社会学にかかわる背景となったのは次の論考で示された考察である。Horst KERN, *Empirische Sozialforschung - Ursprünge, Ansätze, Entwicklungslinien*. München 1982.

ら、そこまで多様な機関の目的・構造・機能を問う非常に大まかな視座が社会学にとって果して生産的なのかという疑義が起き、また一般的な記述が可能であるまでにそれらが十分に同質的であるかも疑わしくなる⁽²⁾。

これに関聯して、19世紀の組合組織に関する研究の場合、ただ一つのタイプから出発していることにも問題がないとは言えない。たしかに、19世紀の組合組織の分析にとっては、組合に共通した構造特性（たとえば家族や企業とは違った構造特性）を明らかにすることがもとめられる。しかしそれに加えて、この構造特殊性もまた変化を遂げたことから、そのなりゆきも問題になる。19世紀の半ばから末期については、たとえば*グンター・トイブナーは、《自由な組合》(freie Vereine) から《自由意志のオーガニゼーション》への変化に出発点をもとめた。またそのさい、次のような推移が決定的であるとも考えられた。

- 組合機能の政治化：自由な組合の私的な目的追求とは異なり、《自由意志のオーガニゼーション》は政治システムと社会的に明示された必要事を仲介する機関として立ちあらわれた。
- 組合の目的の拡散：オーガニゼーションが、メンバーの必要事を直接的に見たすことを超えて成長し、社会的な決定に影響を及ぼすようになるや、オーガニゼーションの特殊性は低下せざるを得ない。
- 目的とモチーフの分離：《自由な組合》の特徴が、合理性構造とモチヴェーション構造の密接な結合にあるとするならば、組合目的が増え官僚主義的構造（特定化・標準化・形式重視化・集権化）が際立つように成ると共に、目的モチヴェーションは先鋭化する。その結果、メンバーの人格的な感覚・モチーフ構造と自由意志のオーガニゼーションの目的構造との間で乖離の度合いが高まる。

組合をアソシエーション（ヴォランティアによるアソシエーション）、す

(2) [訳者補記] この後の段落は長文の原注を本文に移した。内容は、グンター・トイブナーの次の研究からの抜粋とされる。Gunther TEUBNER, *Organisationsdemokratie und Verbandsverfassung*. Tübingen 1978

なわちそのメンバーが経済的な関心に重きを置かず、自由意志であり、また《ある程度》は公共性にかかわると定義するとしても、それによって諸々の団体がそれぞれ異質であると解されることになり、具体的な分析は小さからぬ問題にぶつかる⁽³⁾。

2. 組合（フェルアイン）——ドイツ社会学の鬼子？

組合へのメンバーの関わり方が高密度であることに照らすと、社会科学の諸分野でこれまで組合組織が等閑に付されていたのは奇異である。組合組織のメンバーの質が19世紀から変化をけみしたとしても、今日も組合組織は、それに帰せられる諸機能の多彩なことにおいて社会学的関心が高くてもおかしくない社会的事象であろう。しかし組合がドイツ社会学ならびにドイツ社会をめぐる関心の対象としてテーマとなったのはようやく最近のこととの感は否めない⁽⁴⁾。

-
- (3) 次の拙論を参照, H. -J. SIEWERT, *Verein und Kommunalpolitik*. In: KZfSS, H. 3 (1977), S. 487.; ヨアヒム・ヴィンクラーは“assoziative Organisation“ という術語を採用しているが、その理由として《オーガニゼーションのこのタイプの性格づけのためには、官僚主義的なオーガニゼーションとは異なり、〈自発性〉がそれほど前面に立つことにあるのではなく、メンバーが集まって共通の目標ないしは目的を追求することにある》ためとされる。参照, Joachim WINKLER, *Zur Struktur assoziativer Organisation: Funktions- und Strukturwandel des Deutschen Sportbundes (DSB) in der Bundesrepublik Deutschland* (未刊の原稿). Köln 1981, S. 1. [訳者補記] この学位論文は刊行されなかったが、数年後に同じ問題意識のもう一人の研究者との次の共著が上梓された。Joachim WINKLER, Ralf-Rainer KARHAUSEN, unter Mitarb. von Rolf MEIER, *Verbände im Sport: eine empirische Analyse des Deutschen Sportbundes und ausgewählter Mitgliedsorganisationen*. Schorndorf 1985. またその後の次の編著がある。Joachim WINKLER, Kurt WEIS (Hg.), *Soziologie des Sports: Theorieansätze, Forschungsergebnisse und Forschungsperspektive*. Opladen 1995.
- (4) 近年の研究では特に次の諸文献を参照, Henning DUNCKELMANN, *Lokale Öffentlichkeit - Eine gemeindesoziologische Untersuchung*. Stuttgart 1975; Karl SCHLAGENHAUF, *Sportvereine in der Bundesrepublik Deutschland*. Schorndorf 1977.; H. -J. SIEWERT, *Verein und Kommunalpolitik* (前掲注3); DERS., Walter BÜHLER, Horst KANITZ, *Lokale Freizeitvereine - Entwicklung - Aufgaben - Tendenzen*. St. Augustin 1978.; Peter RASCHKE, *Vereine und Verbände - Zur Organisation von Interessen in der Bundesrepublik Deutschland*. München 1978. [訳者補記] ラシケ (Peter Raschke 1941-L) ハイデルベルクに生まれた政治学者。1984-2006年までハムブルク大学教授。ヘロインなど薬物問題をレポートリーとする。ここで挙げられる組合の研究は学位論文。; D. JAUCH, *Die Wandlung des Vereinslebens in ländlichen Gemeinden Südwestdeutschlands*. In: Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie, 28. Jg., H. 1, April 1980, S. 48-77.; H. -D. HORCH, *Strukturbesonderheiten freiwilliger*

とは言え社会学の展開を一瞥すると、組合組織は、《古典的な学究》にあっても、社会的分節過程との関聯において、社会発展の意義多い新しい構造契機としてテーマに設定されていたことが判明する。しかもテンブルックとルオップにとっては、それは現代とかかわっていた⁽⁵⁾。

現代が立ち現れたのは、組合形成と呼ぶのが最も適切な、ゲマインシャフト化とゲゼルシャフト化の新たな原理からであった。19世紀の組合組織のなかで、ある種の前提の下、諸関係を次々に進展させるダイナミックな諸力を通じて（新たな集団が成り立った。）……したがってここでは、組合組織は、ゲゼルシャフト化の新しい原理に照応する。その原理にあっては、きわめて多様な目的と意図が、すこぶる多彩な諸々の集団の自由な形成へと進んでゆく。そこで肝心なのは、社会的諸力の（さまざまな側面をもつ）自己流動性である。そのように生成した諸集団を把握し特徴をつかむのは、歴史学の側からの組合研究の課題であり、事実この数年間には資料の収集と刊行が相次いでいる。資料から判断すると、社会的流動性の最も普及し最も重要でもある形態を組合組織にみとめる他ないとの認識は不可避である。地域的変動や社会的震動にさらされたり、惰性や不安定に左右されたり、さらに原理的にはある種の人々に限定されたりするのは違い、組合においては、各人の社会的出自による帰属性とは別種の自由な選択の集団に参加する可能性が基本である。そうした優勢は、（常に新たな集団が設立されることができ、また設立されるのでなければならなかった限りでは）ダイナミックな原理に根ざしている。なぜなら、一つの《組合》の形成は、別の組合設立をも促したからである。

組合組織をめぐる諸関係へのかかるスケッチを覗きだけでも、古典的な社会学者たちが組合すなわちアソシエーションに関心を寄せ注目した所以が

Vereinungen. Diss. Trier 1981 (Frankfurt 1983); K. KRÖLL, S. BARTJES, R. WIENGARN, *Vereine: Geschichte - Politik - Kultur*. Frankfurt 1982.

(5) Friedrich H. TENBRUCK, W. A. RUOPP, *Modernisierung - Vergesellschaftung - Gruppenbildung - Vereinswesen*. In: F. NEIDHARDT (Hg.), *Gruppensoziologie*, Sonderheft 25 der KZfSS, 1983, S. 70f.

うかがえる。

2-1. 組合組織の成立——組合と社会的分節化過程

近代の組合組織の発展は、19世紀初期の市民的工業社会への移行と密接に結びついている。農業社会から工業社会への移行は、社会的分節化過程と呼ばれることが多い。そこで、機能的に特化された部分システムの独立によって社会全体の複合性がドラマティックに高まる社会的多様化の過程である。これらの社会的な部分領域の諸機構においては、組合という諸々の機構集団の形態が（市場と官僚制的機構と並んで、またこれらを補うものとして）特殊な役割を果たす。組合は、19世紀の市民社会の構造原理一般に入ってゆく。18世紀末、また特に19世紀の組合思念の社会的感染力は、個々人・家族・ローカルな地平の《脱境界》に発していた⁽⁶⁾。

アソシエーション形成が析出される元の古い世界は、*《家一党》であった。人一人が誕生と身分を通じて組み込まれ、誰もがそのなかで自己の社会的諸関係が満たされ生きていた世界である。身分が団体として機構化されているところでは、その団体への家父長の帰属性は義務であり、同時にある種の権利と結びついていた。団体は、複合機能的で、特殊化をきたさない諸関心を束ねる形成体であり、その形成体は、家と教会の

(6) Thomas NIPPERDEY, *Verein als soziale Struktur in Deutschland im späten 18. und frühen 19. Jh.* In: Hartmut BOOCKMANN u.a. (Hg.), *Geschichtswissenschaft und Vereinswesen im 19. Jh.* Göttingen 1972, S. 7f; また次を参照, Friedrich H. TENBRUCK, *Freundschaft - Ein Beitrag zu einer Soziologie der persönlichen Beziehungen.* In: KZfSS, Jg. 16 (1964), S. 447ff. 最近テンブルックは、特に組合の《近代化機能》に関心を寄せて、一般に行なわれている（部分的には短絡も見られるが）近代理論と比較近代化問題を背景において組合組織を不分析した。また近年では、18、19世紀の組合をめぐる、歴史的な研究が充実してきている。たとえば次の諸研究を参照, Werner QUERFELD, *Kultur- und Vereinsleben in der Stadt Greiz während des 19. Jh.* Jena 1957.; Jürgen HABERMAS, *Strukturwandel der Öffentlichkeit.* Neuwied/Berlin 1962.; Klaus TENFELDE, *Sozialgeschichte der Bergarbeiterschaft an der Ruhr im 19. Jh.* Bonn 1977 (1981²).; Otto DANN, *Die Lesegesellschaften des 18. Jh. und der gesellschaftliche Aufbruch des deutschen Bürgertums.* In: Herbert G. GÖPFERT (Hg.), *Buch und Leser.* Hamburg 1977, S. 160-192.; またドイツ人とユダヤ人の関係との脈絡での組合の形成という興味深い局面として次の研究が注目される。W. HABEL, *Deutsch-Jüdische Geschichte am Ausgang des 19. Jh.* Ratingen 1977, S. 101ff.

外をも含めて人間の生活圏全体を包み込んでいた。団体の価値尺度は分
立して諸集団に関係しているが、社会全体には関係しない。

18世紀には特に*アカデミー・協会運動が《市民と国家の橋渡し》を果
たしたが、19世紀への転換期からは組合がその数を増して、目的をさら
に多様化させた⁽⁷⁾。

19世紀に常に新たな波をつくって人々の新たな部分をまとめたのは正
に組合であった。それも、多様な社会的集団が分岐の動きをみせるなか
でまとめたのである。大学生の組合やフェルバント（聯合）の発展があり、
また市民の集団どうしの結合にあたっての尺度がますます幅を広げ、組
合組織が中流下層や都市の労働者階級にも浸透して教養・社交・山歩き・
ダンス・余暇その他の組合がつくられていった。そこにはもちろん（従
来の）同胞的な結社や互助組織もあり、また最後に若者の組織を挙げな
ければならぬが、これらを諸側面とする発展であった。

元の社会的・文化的な全機能的な集団の特定の部分集団への分離と特定化
への分節化は、そうした部分集団や集団メンバーがそれぞれ特定の機能や
役割や位置を獲得したことと併せて取り挙げなければならない。それによ
って、機関的な諸分野が同時にシステム合理性へと分割をきたしたことが、
現代社会の前提として注目すべき中心点になる⁽⁸⁾。*テンブルックの指

(7) F. H. TENBRUCK, *Freundschaft - Ein Beitrag zu einer Soziologie der persönlichen Beziehungen* (前掲注6), S. 444.

(8) 分節化は、社会的発展のどの時代にも発現するが、これほどの質と量を常に伴うわけ
ではない。たとえば次の歴史研究の諸文献を参照。M. L. STRACK, *Die Müllerinnung in
Alexandrien*. In: *Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft*, 4. Jg. (1903), S. 213-
234; P. FOUCAUT, *Des Associations religieuses chez les Grecs*. Paris 1873; O. LÜDERS, *Die
dionysischen Künstler*. Berlin 1873.; Franz POLAND, *Geschichte des griechischen
Vereinswesens*. Leipzig 1909. [訳者補記] ポランド (Franz Poland 1857-1945) ビルナ (Pirna
SN) に生まれライプツィヒに没した古典文献学者。特に古代ギリシアをレパトリーとした。
ドレスデンのギュムナジウムの校長であった。また全国ギュムナジウム組合 (Deutscher
Gymnasialverein) の会長や、ザクセン文献学者協会 (sächsischer Philologenverein) の設
立にかかわるなど、学校と学会組織の分野で組合組織をかかわった。; Erich ZIEBARTH, *Das
griechische Vereinswesen*. Leipzig 1896. [訳者補記] ツィーバルト (Erich Gustav Ludwig
Ziebarth 1868-1944) オーダー川辺フランクフルトに生まれ、フランケン地方デッテルバッ

摘もそうである⁽⁹⁾。

かくして労働は純粹に労働となり、家族は純粹に家族となり、それと共に存在領域の解体がどこでも起き、様々な仕組みがその特質と密着してはいない全てから解き放たれ、言い換えれば、目的がただそれだけで裸にされて組み上げられる。

別の言い方をすると、社会的構造の分節化があってはじめて、個性の意味での個の発見を意義あるものとして語るができるようになる。伝統的な主要集団である家族・隣人関係、さらに政治的支配までもも個体がはねつけること、それが自由なアソシエーションの前提に他ならなかった⁽¹⁰⁾。

市民社会とその社会的分節化の構造を理解する原理は、近代の觀念のなかに憩っている。《人間の生活と行動の個々の領域は独立した、それだけでまとまった振る舞いのあり方をそれ自身のなかにもっているものと解されるべきものである》⁽¹¹⁾。言い換えれば、目的に合わせた機構化である。かかる分節化過程は、単純化すると、ローカルに規定された存在形式からローカルを超える存在形式への移行として把握される。そこでの人間どうしの結びつきは、本質的にローカル性から独立している⁽¹²⁾。

近代社会の複合性は、社会的脈絡の新しい次元のなかにある。この次

ハに没した古代史家。ハムブルク大学教授。；ただし、《分節化》(Differenzierung)のコンセプトで、興味深く幅も大きい多様なパースペクティヴをカバーできるかどうかという問題は残る。

- (9) Friedrich H. TENBRUCK, *Gesellschaft und Gesellschaften: Gesellschaftstypen*. In: A. BELLEBAUM (Hg.), *Wissen im Überblick*. Freiburg 1972, S. 66.
- (10) 参照, Georg SIMMEL, *Soziologie*. Leipzig 1908, insbes. S. 709, und DERS., *Die Großstädte und das Geistesleben*. In: M. LANDMANN (Hg.), *Georg Simmel - Brücke und Tür*. Stuttgart 1957, S. 227-242.
- (11) K. H. PÄHLER, *Verein und Sozialstruktur*. In: *Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie*, Be. XLII (1956), S. 202.
- (12) Friedrich H. TENBRUCK, *Über Kultur im Zeitalter der Sozialwissenschaften*. In: *Saeculum*, 14/I (1963), S. 28f. テンブルックによれば、プリミティヴな社会でも、交換、また原初的な政治的オーガニゼーションがローカルな次元を超えて広がり、従ってローカル性を越えた枠組みと関係が存在する。しかし社会的アイデンティティの観点からは、ローカル性を越えたそうした関係は重要性をもたない。

元における脈絡は、脈絡の数の多さ、原理的にはさらに増える可能性、脈絡が含む人間の多さにおいて露わになる。また最後に付けくわえるべきは、それらの脈絡が、ローカルな近しさから必然的に可能となる諸関係において現れることで、従って直接的あるいは間接的に組織される他ないことである。

18世紀および19世紀の組合組織は、疑いもなく、個人主義ならびに上でふれた社会的分節化過程の函数であった。所与の社会的役割や関係のあり方は、旧来のローカルな指針を脱却した個人の行動の広い幅に対してはもはや尺度として十分ではなくなった状況下、組合が、(分節化過程の結果として発現した) 内面的にも外面的にも不安定な姿勢を落ち着かせる可能性の一つを呈示した⁽¹³⁾。

(組合は) 特定の諸点では不十分になってしまった構造を支えるか、あるいは拡大することができる。なぜなら、(これまでの研究からも明らかように) それが組合の一般的な機能だからである。広く組合形成が起きたのは、決まって激しい社会変革の様相の時期と言えそうである。18世紀の組合の多さは、その頃、人々が社会変革の正当化との絡みで機関化を図ったことに注目を促している。

組合組織の成立にとっては社会の分節化過程とその影響が基底的であると見てよく、また歴史発展に徴すると、この分節化が先ず大規模に起きたのは都市、とりわけ19世紀の産業都市や工場都市であった。そこにおいて、人々の集団が組合組織との関係で把握でき、それらの諸集団が分節化過程に引き込まれていたことが跡づけられる。そうであるなら、組合は、先ずは《典型的な都市の現象》⁽¹⁴⁾として現れる。すなわち新たな都会的な生活形態の具体化であった。組合は、組織原理ではローカル性を越えた方向性

(13) F. H. TENBRUCK, *Freundschaft - Ein Beitrag zu einer Soziologie der persönlichen Beziehungen* (前掲注6), S. 444.

(14) Renate PFLAUM, *Die Vereine als Produkt und Gegengewicht sozialer Differenzierung*. In: G. WURZBACHER, *Das Dorf im Spannungsfeld industrieller Entwicklung*. Stuttgart 1954.

をそなえ、それによって、個々人の外部へ延びるネットワークを後押ししたのである。

都会の諸力の作用の下、組合の理念は、19世紀の初めには村落部にも浸透した。ちなみに*ヴァルナーがハイデルベルク郡の組合の分析で得た研究結果によれば、機関の面から見ても個々の人々の活動から見ても、組合設立のイニシアティヴは、非常に多くの場合、社会的にアクティヴなよそ者（外来者）に起因した⁽¹⁵⁾。

教区牧師（教区司祭）、教師、市長（村長）、町村体の書記、工場主、さまざまな職種の都市からの移住者、ときには地元の地主のこともあった。その誰もが、組合という器官を通じて村落民の関与を促すことを意図していた。教養や知識、新しい社会形態と文化的内実、一口に言えば都市をモデルとした同化運動の意味においてであった。

少なくとも19世紀初めには、開放志向の都市市民社会に対峙するかたちで、それとは質的に異なった社会システムが農村としての地方町村体には厳然と存在した。たしかにヨーロッパの村は、工業化の前でも農業村の性格は半面にすぎないか、あるいは農民だけではない層をかかえていたが、それでも19世紀の段階ではまだ家族・隣人関係・教会の諸分野がそれぞれ堅固なまとまりをつくっていた。村落の社会システムであり、その諸分野が補完し合うなかへ個々人は相対的に強固に組み込まれていたと解することができる。その面でも、組合は《都市からの輸入品》であった⁽¹⁶⁾。

村落的・農業的な生き方のマイクロコスモスとそこでの主要な社会形態、すなわち三世代家族、親族、同胞体の性格を帯びた隣人関係、若者組と娘組、その慣行と習俗、これらが世界秩序の柱である。この全体像が《社会的な総体現象》を表わしている。そこでは、所与の社会的基

(15) Ernst M. WALLNER, *Die Rezeption städtischer Vereinswesens durch die Bevölkerung auf dem Lande*. In: G. WIEGELMANN (Hg.), *Kultureller Wandel im 19. Jh.* Göttingen 1973, S. 165.

(16) 同上, S. 162.

本形式を越えて特定の目的のために自由意志の団体をつくらうとの希求はほとんど芽生えようがない。村が農業村から手工業村あるいは労働者住宅地域へと変わり、それと並行してメンタリティに新しいものが現れ、また村と町がつながるようになって、ようやく農村は多彩な組合に門戸を開いた。そこでの組合とその多様性は、変容過程の帰結として生成していたものというよりは、早く浸透していた場合でも、基本的には新来の仲介者と評すべきであろう。

2-2. 初期の社会学の対象としての組合

19世紀の分節化過程がどれほど中心的なテーマであったかを示すのは、多くの社会学者がこれにかかわった事実であろう。^{*}ハーバート・スペンサー、^{*}アルベルト・シェフレ、^{*}ゲオルク・ジムメル、^{*}エミール・デュルケーム、^{*}マックス・ウェーバーである⁽¹⁷⁾。事実、組合組織との取り組みが見えてくるのも、この系譜においてである。中でも強烈な印象を放つのは、マックス・ウェーバーが組合組織の分析に向けてシステマティックな方向付けをおこなったことであろう。

マックス・ウェーバーは、1910年の第一回ドイツ社会学者大会の一日目に、組合組織の（経験型！）調査に向けて課題設定を試みた。彼にとって、（新聞の社会学や社会全体にかかわるエリート研究の社会学と並んで）^{*}《集団の社会学》の輪郭を描くのは、取り組み甲斐があると共に喫緊であった。そして基底的な課題をこう言い表した⁽¹⁸⁾。

(17) 特に次を参照, Georg SIMMEL, *Soziologie - Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*. Leipzig 1908.

(18) Max WEBER, *Geschäftsbericht*. In: Verhandlungen des Ersten Deutschen Soziologentages vom 19.-22. 10. 1910 in Frankfurt/M., Tübingen 1911, S. 52f. マックス・ウェーバー以前に組合すなわちアソシエーションと取り組んだのは、《法学と国家学》のエポックにおける法学者たちであった。たとえばギールケ (Otto von Gierke 1841-1921) は、器官学的な団体理論 (organologische Verbandstheorie) を論説した。古代ギリシアや古代ローマの国家法の研究のなかでも、法学者や、一般には歴史家の関心の中心に入ったことが散見される。同様に上古学の研究者 (神学者もそうだが) は、非常に幅広く材料を集めた。たとえばギールケの次の論著を参照, Otto von GIERKE, *Das Wesen der menschlichen Verbände*. Berlin 1902.; またギールケの団体法の論作では多数の歴史資料が繰り広げられる。DERS., *Das deutsche Genossenschaftsrecht*. Bd. 1. Berlin 1968.; 19世紀末から20世紀初めの諸例として次を参照, Wilhelm LIEBENAM, *Zur Geschichte und Organisation des römischen Vereinswesens*. Leipzig 1890. [訳者補記] リーベナム (Wilhelm Liebenam 1859-1918) アイスレーベン

古くから《ゲゼルシャフト的》と呼んできた形成体を研究の対象とすべでしょう。政治的に組織された、あるいは政治的とみとめられ力、すなわち国家・町村体・公的なものとしての教会、これが一方にあります。そして自然的に生い出た家族というゲマインシャフトが他方にあり、その中間に位置する形成体です。したがって、とりわけ、語の最広義において組合組織（結社／集団）の社会学です。それは（まったくドラスティックな言い方になりますが）ボーリング・クラブにはじまり、政党や宗教宗派や藝術の会派や文藝の流派までを含みます。

(マックス・ウェーバーによるフェルアイン／組合へのコメント)

マックス・ウェーバーが殊に関心を寄せた以下の諸項目は、今日なおアクチュアルな分析の次元にあると言ってよい。

(1) ☆集団のゲゼルシャフト的機能と文化横断的な比較⁽¹⁹⁾

☆集団：原語はVereinswesenであるが、本邦のウェーバー研究での訳語をもちいる。

集団の質的な意義は、量的な広がりと共に手を携えて進行するものではありません。質的に見た場合、どこが特に組合（結社）の国でしょうか？……アメリカのデモクラシーは決して砂上の楼閣ではなく、排他的なセクトや組合やクラブのごった煮です。これら（諸集団）が、アメリカ人の生き方に総じてマッチした選良を支えています。すなわちこれ

(Eisleben ST) に生まれゴータ (Gotha TH) に没した古代史家。イエナ大学で古代史の分野で1882年に学位、1886年に教授資格を得、ゴータでギュムナジウム教師、またイエナ大学でも教えた；次も1909年である。F. POLAND, *Geschichte des griechischen Vereinswesens* (前掲注8)；1896年の次を参照、E. ZIEBARTH, *Das griechische Vereinswesen* (前掲注8)；国民経済学者アルベルト・シュフェレはマックス・ウェーバーより前に社会的形成体としての《組合》が社会的に重要な意味をもつことを次の著作のなかで指摘していたが、論説の中心に据えてはいず、またそれを取り上げた論説を書いたわけでもない。Albert SCHÄFFLE, *Bau und Leben des sozialen Körpers*. Tübingen 1886²；トクヴィルがアメリカの組合を仲立ちグループとして論じたことについては次の当該箇所を参照、Alexis de TOCQUEVILLE, *De la Democratie en Amerique*. Paris 1981, T. 2., pp. 137-152 (1840).

(19) Max WEBER, *Geschäftsbericht*. (前掲注18), S. 53ff. DERS., „Kirchen“ und „Sekten“ in Nordamerika - Eine kirchen- und sozialpolitische Skizze. In: *Die christliche Welt*, Jg. 20 (1906), S. 558-562 u. 577-583.

ドイツ社会学の研究課題としてのフェルアイン（クラブ・組合）(1)

ら（諸集団）が、彼らが、ビジネスや政治の、またあらゆる種類の社会的なリーダーになることを助けています。——翻って、ドイツはどうでしょうか。そのあり方において、規模において、似たものがあるのでしょうか？ どこに？ どんな一貫性を以て？ 違いはどこにあるのでしょうか？ それとも似てはいない？ どうして似ていない？ 外に目を向けるならば、これもたしかに事柄の一面なのです。

(2) 組合への所属がメンバーにとってもつ意味⁽²⁰⁾

特定の種類の結合体への帰属は内面にどう影響するのでしょうか。すなわち、個人にとって？……内面のあり方に違いがあるのかどうか。いわゆる《人格》はどんなバランスをとるのでしょうか？ この人格を新しい土台にすえる必然性の重要さはどうでしょうか。そうした内面的な問題設定の下、個々人が組み込まれているそうした[☆]社会的諸関係のアンサンブルの影響へ向かう動きが実際に起きてきます。自己《自身》の脈絡にこの影響が絡んでくるのです。

[☆]原語は *soziales Ensembles*：本邦の社会学界での訳し方に従う

(3) 集団の選抜機能と経歴機能⁽²¹⁾

いかなる条件の下で、(私が言いたいのはこうなのですが)どんな《行動規範》の下で、組合や政党、あるいは何であれ、その個々のカテゴリーのなかでリーダーの選別がおこなわれるのか、これは設問によって決定的ですが、どんな種類の人格が支配を獲得するのか。またこれは非常に特殊な組合のことになりますが、周りの世界の文化条件ごとに答えがなされることになるでしょう。しかしこれは、社会学の中心に位置する肝要の問題ですが、それに加えて、重なってくるのは、いかなる手段によって、指導的なグループが、組合に対するロイヤリティを獲得するのか、つまり自己の支配を確実にすることを目指すのか、

(20) Max WEBER, *Geschäftsbericht*. (前掲注18), S. 55.

(21) Max WEBER, *Geschäftsbericht*. (前掲注18), S. 56.

ということです。

(4) 集団のイデオロギー生産の機能⁽²²⁾

何らかの組合、繰り返しになりますが、政党から（パラドックスに響くでしょうけれど）ボーリング・クラブまで、任意の組合と、語の最広義においてですが《世界観》と呼んでもよいものとの間にはどんな関係があるのか。つまりそうした関係がどこでも何らかのかたちをとっており、それも思いもよらないところにもです。しかし非常に多様な仕方で…… 他面では、ほとんどいずれの組合も（原理的にそれを避けようとするものも含めて）何らかの仕方で《世界観的な》内容を引き寄せています。ある意味では、ドイツの歌唱組合は言わずもがなですが、ドイツのボーリング・クラブ（組合）ですらそうだと言っても構いません。そこで、皆さん、少しこれを取り上げますと、ドイツで歌唱組合の組織が開いたとき、それは、私の見るところでは、ちょっと予想がつかないような分野にも大きな影響を及ぼしました。たとえば政治の分野です。喉を振りしぼって胸いっぱいの高揚した感情を吐露するのを習慣にしている人は、それを自分の行動につなげているわけではなく、また表出された高揚感と相照らす高ぶった行動へ進んでゆくわけでもないのですが、これが歌唱組合での営為の本質なのです。簡単に言いますと、受動的な意味合いにおいてですが、手もなく《よき国家市民》になってしまうのです。支配者が、そうした団体を大歓迎したのは不思議ではありません。正に、《歌うときには、先ずは落ち着いて座ること！》です。そうすれば高ぶった感情もかんだ行動もおさまりますから。

なお、こういう関聯ではめずらしいことだが、ゲオルク・ジムメルが同じ大会の夕べの挨拶において「社交の社会学」という講演をおこなったのは、決して不思議ではない⁽²³⁾。

(22) Max WEBER, *Geschäftsbericht* (前掲注18), S. 56f.

(23) Georg SIMMEL, *Soziologie der Geselligkeit*. D S. 1-16. これについてはゲーリングの優れ

ジムメルの『社会学—社会化の諸形式の研究』のなかでも、特に「社会的あつまりの交叉」の章では、組合組織の展開と傾向への多彩な示唆がみとめられる。しかしそれらも、組合研究・オーガニゼーション研究にとってはほとんどかわりがないものであった。社会的ネットワークのコンセプトと共に、ジムメルの分析への注目がなされるようになったのは、ようやく最近のことである⁽²⁴⁾。

マックス・ウェーバーの研究意図について言えば、ともかくもドイツでは、僅かではあれ実現を見た。オーガニゼーション社会学の設問に答えることを試みたのは、*フランツ・クラインの『現今のオーガニゼーション組織』（1913年）⁽²⁵⁾で、そのなかでクラインは、『戸惑わせるばかりの洪水のような材料』を整理し、システムに組み上げることが試みた。しかしこれは、組合をめぐる刊行物が無限に多様ではなくなったことを意味しない。個々の組合ないしは組合の類型は、同時代の姿の意味で検討され、また組合組織の機能、たとえば『教会と労働者組合』といったテーマなどで激しく議論された⁽²⁶⁾。しかしマックス・ウェーバーが輪郭を呈示したような社会学に特有の問いは一向に追跡されないままであった。

*アルフレート・ウェーバーも、*ハンス・シュタウディング어의『フェルアインの文化オーガニゼーションにおける個人とゲマインシャフト』（1913年）に批判的な前書きを寄せて牽制した⁽²⁷⁾。

個人とゲマインシャフトをめぐるではどれほど多くが書かれてきたことか。どれほど精神ゆたかにして取り払いようのない発展線が引かれてきたことか。形ある関係がどれほど輝かしく説かれてきたことか、そして社会学全体の下支えになるものがどれほどつくられてきたこと

た論考を参照, Axel GEHRING, *Die Geselligkeit - Überlegungen zu einer Kategorie der „klassischen“ Soziologie*. In: KZfSS, 21. Jg. (1969), S. 241-255.

(24) Georg SIMMEL, *Soziologie* (1908 前掲注17), S. 411ff.; Hans-Jörg SIEWERT, *Lokale Elitesysteme - Ein Beitrag zur Theoriediskussion in der Community-Power-Forschung und ein Versuch zur empirischen Überprüfung*. Königstein/Ts., 1979, S. 109ff.

(25) Franz KLEIN, *Das organisationswesen der Gegenwart*. Berlin 1913.

(26) たとえば次を参照, Otto MÜLLER, *Katholische Arbeitervereine - Ihre Notwendigkeit, Aufgaben und Einrichtungen*. M. -Gladbach 1907.

(27) Alfred WEBER, *Geleitwort*, In: Hans STAUDINGER, *Individuum und Gemeinschaft in der Kulturorganisation des Vereines*. Jena 1913, S. 1.

か。しかし展開を現実映すような具体的な土台との取り組みはめったになかった。その展開を提示するはずの不朽の労作は皆無も同然であった。なぜなら、組合には集約と拡散が、個人の一般性への登場と退場が、ゲマインシャフトならではの行動、言い換えれば、生物学的な必要性やその変遷からではなく、それ自体の赴くところして定着している。すなわち、家族のなかに、経済に、国家に、等々。それも、自由な選択と自由な意志に一貫して依拠している。それが集いの位相であり、集うものとしてのフェルアインの位相である。

ちなみにシュタウディングーにとって、フェルアインとは何だったか⁽²⁸⁾。

目の前にただよう目的への到達のために人間が集まるだけのものではなかった。すでにフェルアインが成り立てば、それ自体は個々人の次元では視界から退いた。フェルアインは、成立してしまうと、その歴史・伝統・設立年・周年記念などをもったことは、会合体 (Gemeinwesen) と呼ばれるあらゆる歴史的な形成体と同じであった。それは小さな共和国であり、選ばれた選良があり、犯罪には法律があり、党派があり、革命すら起きた。

社会学のやはり古典的存在である*テンニェスの場合は、フェルアイン(結社)は《ゲゼルシャフト的団結体》に属するとされる⁽²⁹⁾。

第一の概念 (ゲマインシャフト的団結体 *gemeinschaftliche Verbindung*) に同胞体 (Genossenschaft) という名称を、第二の概念 (ゲゼルシャフト的団結体 *gesellschaftliche Verbindung*) に結社 (Verein) という名称を与えるならば、次のようなことになる。同胞体はいわばいわば自然の産物であって、その起源およびその発展の条件からすると、おのずから

(28) 同上, S. 3.

(29) Ferdinand TÖNNIES, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. Darmstadt 1972, S. 228. [邦訳] フェルディナント・テンニェス (著) 杉之原寿一 (訳) 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粹社会学の基本概念』理想社 昭和29年, p. 312ff. 第3篇 § 28 「同胞体と結社」

成ったものと考えることができる。したがってまた、同様なことは自治共同体という概念についても言われる。これに反して結社は、思惟によって作りだされた或いは擬制された存在であって、なんらかの関係を結べる創設者たちの共同の選択意志を表現するために用いられる。すなわち、結社はある目的を達成するための手段・契機として設けられたものであり、したがって、ここでは何よりもまず目的が問題とされなければならない。このことはまた、一般的なゲゼルシャフトの結社たる国家という概念についても当てはまる。

テンニエスの《ゲマインシャフト》と《ゲゼルシャフト》の区分に依拠して、《結びつきの社会学のカテゴリー》を論じたのは*ヘルマン・シュマーレンバッハであった⁽³⁰⁾。

今日ではほとんど引用されない組合に関する文献には、*レーオ・ヒルベラートの『アイフェル地方の若者組合』がある。*レーオポルト・フォン・ヴィーゼによって、1920年代末から30年代初めのケルン社会学ゼミナールが企劃したエクスカッションのために始められ育成された社会調査は、その社会的な特色によって見るべきものであった⁽³¹⁾。そこでヒルベラートは、社会変化と組合機能のテーマに手を染めた（「破壊と再建のプロセス」⁽³²⁾）。

私たちが行なった緻密な調査問題のなかで浮き彫りになった差異に対しては、《破壊》が（場合によっては青年組合という形での《再構築》も含めてだが）たどる幾つかの社会的推移を呈示すれば、充分説明がつく。ここで大事なのは、《工業化》と《都市化》の直接・間接の社会的推移で、それは状況次第で破壊的あるいは再建的な作用を發揮する。それに対して、政治的な変化はそれほど重要ではない。これらの

(30) Herman SCHMALENBACH, *Die soziologische Kategorie des Bundes*. In: Die Dioskuren. Jahrbuch für Geisteswissenschaften, Bd. 1. München 1922, S. 35-105.

(31) Leo HILBERATH, *Der Junggesellenverein in der Eifel - Ein Beitrag zur Soziologie der Altersklassen, Männerbünde und der Geschlechter*. Köln 1931. [訳者補記] 本書は1929年にボン大学に提出された学位論文の刊本。

(32) L. HILBERATH, *Der Junggesellenverein in der Eifel* (前掲注31), S. 66/67.

推移は、純然たる村落地域の周辺で特に観察される。……形成体の溶解や破壊が、常に、どの場合でも起きたわけではない。むしろ、目的に変化が起きること、すなわち集いをもとめる一人一人の必要性や希求などによって変化が起きることが観察される。*新緑祭の乙女の競り落としの企劃は批判が収まるまでしばらく延期されるが、結局、とりやめになる。こうして、内容面ではこれまでとは違った形成体として《つどいの組合》が成立する。しかも、元の若者組合の外形と諸関係を保存していても、元とはまったく異なったものになることもあり得る。事実、一般に承認されたいとのモチベーションが中心になって若者の射撃協会の再編が起きた事例が幾らもある。

フォン・ヴィーゼが呈示した《社会的推移過程と社会的形成体の学としての一般社会学のシステム》は、《相互作用の単純な社会的推移過程》の見出しの下に、「人間関係の単純な社会的推移」のタイトルの下に、《大きなグループ》が取り上げられた。またそれは次ように区分された⁽³³⁾。

- I. a) その都度その都度の一時的な結社 (Vereinigung)
- b) 永続きする結社
- II. 強いられた結社と自由意志の結社
- III. a) 身体的・技術的な力量による協同 (Kooperation)
- b) 意志的な結社による協同
- c) 精神的な協同

ここでフォン・ヴィーゼが取り上げた組合の構造特性と構造問題は、後に(たとえば)*ニクラス・ルーマンによってようやく理論的な深化をみることになる。結社の一時的な緩やかな構造と永続きするまとまりの組織的な前提、結社の指導と協同作業、などの諸問題である。

(33) Leopold von WIESE, *System der allgemeinen Soziologie als Lehre von den sozialen Prozessen und den sozialen Gebilden der Menschen (Beziehungslehre)*. Berlin 1955³. 引用文は第3版によるが、ここで関心を惹くパッセージは初版にも第2版でもすでに見ることができる。

ちなみにメンバーが3人以上の大きさのグループについて説明するなかで、フォン・ヴィーゼは、社会化機能ないしはアイデンティティ機能を、「個人的特質と集団特質」のタイトルで論じた⁽³⁴⁾。

グループのなかでは、倫理的な面から見ると、人間はやはりプリミティヴである。彼が知っているのは唯一の美德、すなわち（他ならぬ自分のグループへの）従順である。彼が所属しているグループ（厳密には、多数のグループに属していることもあるため、主に属しているグループ）は、彼に命令と見本と尺度をあたえる。これは、特に若い男性にあてはまる。

団体のなかで、内面的に彼を導くのが家族であることは稀である。特定の小さな圏域（*若者組合、*キリスト教労働者組合、宗派など）のなかにはのみあるのは教会である。国家は、結局、間接的な聯関のなかにあるにすぎず（また正しく見つめられることはほとんどなく、霧のような《ナショナルな》気分の対象であり）、それが若い男性には命令を伴うものとなる。彼は、それを自分が所属する自転車クラブあるいは体操組合、*鉄兜団、*人狼団、*赤色戦線戦士同盟、*ナチス協会、*大学同門会、等々のために借用する。それが、彼の心身を事実上支配する。それらは、今日の平均的な若者の愛の対象である。彼はまた、たいいていの場合、自己個人の関心をそれらの下位におく。

多くの人々のなかで支配的なそうした下屬衝動は、多くの場合、グループのなかに直接の対象を見出した。抽象的な集合は、単純な人間の感覚には、間接的にふれることができるだけで、充分にはつかむことができない。直接的で感覚に見合った把握のためには、歴史に点滅する稀で決定的な頂点の瞬間を別にすれば、大きな洞察力と思考能力が要求される。しかし組合や同盟やクリークや常連テーブルや男声コーラス団や労働組合は、人格に充分近く存在している（遠いこともあるが）。これらのグループがあってはじめ、個々人と大きな団結体（Körperschaften）との聯関が仲介される。

(34) 同上、S. 487.

のみならず、《グループ倫理》や《団体精神》や《グループ規準》のような現象も取り上げられる。《グループ》(ここでの意味ならむしろ結社(Vereinigung)と呼ぶのがよいだろうが)の経験的な分析についても、フォン・ヴィーゼは調査を促した。

1. グループにおいて満たされるのは、個々人のどんな主たる願望か？
その程度は？ またどんなコンビネーションにおいて？
2. 何がグループの尺度になっているのか？
3. グループのふるまいはどう表出されるのか？

具体的な調査対象として挙げられるのは、ボヘミアン、テーブルの常連、男声コーラス、クラブ、クリーク、秘密結社、盟約、である。さらにこう敷衍される⁽³⁵⁾。

どんな状況の下で、乞食あるいは特定の犯罪者カテゴリー(たとえば^{ナリ}拘摸)はグループにまとまるのか。どこまで、どのグレードまで、従僕や知識人や文筆家はグループにまとまるのか。何が、社会的形成体としてのそれらの特質をつくっているのか。お茶の集まりや、《^{ターフ}大会》と呼ばれる集会(つまり社会学者《大会》、医師《大会》、法学者《大会》、等々)とどんな親近性があるのだろうか。

すこぶる研究し甲斐があるのは、グループとしての子供部屋である。比較的単純なのはオーケストラである。さらに、学校クラスの秘密はどこにあるのだろうか。

はっきり分かることがある。ここには、組合を分析するための刺激と手掛かりが十分にあること、と共に、マックス・ウェーバーの研究次元と照らし合う諸点に手が染められたかも知れないこと、しかしフォン・ヴィーゼの熱心な作業がほとんど受け入れられなかったことである。

1931年に、先行研究にはまったく触れられてはいないが、教育学の分

(35) 同上, S. 502.

野で組合活動が中心的に扱われた。教育と教育者の研究が実りあるものとなるための前提は状況の把握にあると考えた*フリッツ・ドイツマンが、「村のグループ」のタイトルの下で、特に地域の組合に触れたのである⁽³⁶⁾。グループの機能、それを《目的》と呼んで、ドイツマンはこう論じた⁽³⁷⁾。

1. 共通に役立つ目的だけを追うか、あるいはゲマインシャフト思念を育成すること(これには、よく言及される隣人関係も含まれる)、それらが組合である限り、宗教的な性格を帯びる。
2. 組合はセンセーションを欲している。人は新奇なものを体験することを欲し、変化を味わい、週日は毎日8時間かそれ以上満足ができない退屈な仕事をこなした後、日曜には何かを共にしようとする。
3. そこには、何かをし遂げようとする志向がからんでいる。それが最も強く現れるのは、参加していることが目立たない人々においてである。たとえば、将校になって命令したり、学生帽で舞台上に立ってみたりしたがる。何か役を演じ、注目を得ようとする。長いあいだ数字か道具として扱われてきた後、人間らしくなろうとするのである。ここでは個性が発露するが、余所ではそのチャンスはない。
4. 営利を得るために集まることもある。それが最もはっきり表れるのは、祭りを開催することもなければ、お歴々を招くこともないような農民組合においてである。

見下すがごとき形式化ではあるが、2番目と3番目などは、現代の余暇社会学で取り上げられるリフレックス機能・リアクション機能・代償機能にはほぼ該当する⁽³⁸⁾。

(36) Fritz DEUTZMANN, *Miliefaktoren eines rheinischen Dorfes*. Paderborn 1931.

(37) 同上, S. 74f.

(38) たとえば次を参照, Jürgen HABERMAS, *Soziologische Notizen zum Verhältnis von Arbeit und Freizeit*. In: *Konkreter Vernunft*, Festschrift für E. ROTHACKER. Bonn 1958, S. 219ff.; また次を参照, H. OPASCHOWSKI, W. HELMER, *Freizeit als soziokulturelles Lernfeld - Eine*

2-3. 研究から《消えた》組合

1933年のナチスの政権奪取の後、もはや社会学は存在しなかった、とはよく口にされる。その見方とは相違をきたしかねないが、政治状況の変化が社会科学を部分的にはある種の断絶に追い込んだことは疑えない⁽³⁹⁾。

社会学、ならびにそれをも含む社会調査がナチ時代に経験したとてつもない喪失が意味するのは、前代に社会学のイメージをつくっていた多くの学究が追われたことにとどまらなかった。ヴァイマル時代に社会学が、なげなしとは言え獲得していた機関化への足掛かりも同時に失われた。……これらすべてが意味するのは、社会学の機関への歩みがさまたげられ、後戻りを余儀なくされたことである。逆に、微々たるものであった諸要素でも、1933年以前には、大々的に進む軌道がひろがっていた。

この時期、組合はテーマではなかった。たとえば、《指導者原理の組合や地域グループへの影響》⁽⁴⁰⁾が取り上げられるようなところでは、組合の権利（〔訳注〕結社の権利とも訳せる）の枠組みは存続できなかった。代わって、《^{フント}盟約》が、時代精神にとって実り豊かなカテゴリーとして、社会科学者の耳目を惹いた。ちなみに*ヴォルフガング・ブローバイルは、学位論文においてこう論じた⁽⁴¹⁾。

盟約 (Bund) のカテゴリーによって、私たちは、ナチズム運動という社会現象を社会的に（従来のカテゴリーに較べて）よりよく理解する道具を手にしたと言えるだろう。……何を素材として取り上げるかについても、これによって、ナチズムという歴史的経験を社会的に研究する志向のなかに基礎づけられる。

Chance für die Erwachsenenbildung. In: *Erwachsenenbildung*, Nr. 4 (1974), S. 159.

(39) H. KERN, *Empirische Sozialforschung* (前掲注1), S. 210f.

(40) A. RUMPF, *Der Einfluß des Führerprinzips auf das Verhältnis von Verein und Ortsgruppe*. Diss. Tübingen 1935.

(41) Wolfgang BROBEIL, *Die Kategorie des Bundes im System der Soziologie*. Diss. Frankfurt 1936.

ナチ時代の組合を民俗学の研究対象として括り出すにあたって*ヘルマン・パウジンガーがほどこした概括的な説明は、社会学にも引き写すことができる⁽⁴²⁾。

ナチズムは、*青少年運動などによってくっきり現れた盟約の諸形態を歓迎し、その種のターミノロジーを活用した。ナチ党の地方組織の形成が他ならぬ組合と近似した性格にあったことは、それらが《運動》を構成する部分でありながら同時に盟約的なまとまりでもあり、また正にそう解されていた事実ともども注目すべきものであった。そうした理解がなされたのは、元素的な偉大さという見かけの故であった。と同時に組合は簡素かつ無邪気な事象なのである。

これ以前とこれ以後に伸びている集住社会学や農業社会学の研究、またその一部はナチズムの人種イデオロギーや《血と土》イデオロギーの旗の下にあったが、そこでは、組合への言及は、*ハンス・F・K・ギュンターや*グンター・イーブゼンに徴しても、いずれせよ周遍的なものにとどまった⁽⁴³⁾。ナチスによる組合の《翼賛》は、社会科学の研究のカルテから、このテーマを排除してしまった⁽⁴⁴⁾。——以下次号——

(42) Hermann BAUSINGER, *Vereine als Gegenstand volkskundlicher Forschung*. In: Zeitschrift für Volkskunde, 55. Jg. (1959), S. 100.

(43) たとえば次を参照, Hans F. K. GÜNTER, *Die Verstädterung - Ihre Gefahren für Volk und Staat vom Standpunkt der Lebensforschung und der Gesellschaftswissenschaft*. Leipzig u. Berlin 1934; Johannes KUTHE, *Bauerntum und Stadtkultur - Soziologische Ermittlungen an zwei Gmeinden in der Wilstermarsch*. Diss. Hamburg 1934.; J. PAGEL, *Bevölkerungsbewegungen und Erbgefüge des Rhöndorfes Speichen*. Würzburg 1937.; M. MURR, *Die Entwicklung Sennfelds unter dem Einfluß der Industriestadt Schweinfurt*. Diss. Würzburg 1938.; St. SEEBERG, *Dorfgemeinschaft in dreihundert Jahren*. Berlin 1938.; W. KAGER, *Ziele und Grenzen der Kleinsiedlung*. Diss. Frankfurt 1939.; J. MÜLLER, *Ein deutsches Bauerndorf im Unbruch der Zeit - Sulzthal in Mainfranken*. Würzburg 1939.; なおイデオロギー含みとなると、グンター・イーブゼンの穏当な範囲にあると言えなくもない研究でも組合にはまったく注意が払われていない。参照, Gunther IPSEN, *Das Landvolk - Ein soziologischer Versuch*. Hamburg 1933. 及び DERS., *Dorfforschungen*. In: Zeitschrift für Volkskunde, 47. Jg. (1938), NF. H. 1, Berlin 1938, S. 17-250.

(44) たとえば次を参照, Hans-Joachim ALTHAUS u.a., *Da ist nirgends nichts gewesen außer hier*. Berlin 1982. [訳者補記]《赤いメッシングン》に関するまとまった論集で、また同事件についてはレーマンの論考への訳注を参照（愛知大学国際問題研究所『紀要』第154号 p. 108）。

訳注

- p. 289 **グンター・トイブナー** (Gunther Teubner 1944-L) ヘルンフート (Herrnhut *SN*) に生まれた法学者。ゲッティンゲン大学とテュービンゲン大学に学び、1970年に後者において法学の分野で学位を得た。1977年にこの箇所で紹介された研究によりテュービンゲン大学で教授資格を得た。1993年にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの教授、1998年にフランクフルト大学の法学の教授となった。
- p. 292 **家一党** (ganzes Haus家その全体) 近代前期の社会の基底的な単位としての大家族を指し、特にヴィルヘルム・ハイน์リヒ・リールが強調したことによって術語として定着した。
- p. 293 **アカデミー・協会運動** (Akademie- und Gesellschaftsbewegungen) アカデミーは専門家の集まり及び専門学校を指す。バロック時代に国民語の表現規則や国語美の法則を追求した国語協会の後進の性格をもつ場合や、領邦官僚を養成する因習化した大学の刷新を目指した専門学校の場合などがある。アカデミーは大学 (Universityの語意はギルド的な権利認可団体) のようなギルド的な特殊権益の認可をもとめず一般の法の支配下にある機関を言う。協会は歴史学協会のような学術愛好家の集まりや、知識の弘布を図った読書協会などを指す。
- p. 293 **フリードリヒ・H・テンブルック** (Friedrich H. Tenbruck 1919-94) エッセン (Essen *NRW*) に生まれ、テュービンゲン (*BW*) に没した社会学者。フライブルク大学で歴史学・ゲルマニスティクその他、特にハイデッガーに就いて哲学を進んだ、やがてハイデッガーから離れて、ベルリン、ケルン、グライフスヴァルト、マールブルクの諸大学で哲学を学び、1944年にマールブルク大学でカントの「純粹理性批判」の研究で学位を得た。1950年代に社会学に転じ、アメリカ留学と、数か月間マックス・ホルクマイマーの助手を務めた後、1962年に「歴史と社会」の研究によってフライブルク大学で教授資格を得た。1963年にフライブルク大学で教授、1967年にテュービンゲン大学教授となった。これ以後、マルクス主義社会学や1960年代に優勢であった構造機能主義 (タルコット・パーソンズの学派) への批判活動を活発におこなった。マックス・ウェーバー全集の編者の一人であった。弟子には宗教社会学者アーロイス・ハーンなどがある。
- p. 296 **ヴァルナー** (Ernst M. Wallner 1912-2007) ルーマニアのトラニシルヴァニア地方のドイツ人地域の一角 (Metttersdorf im Nösnerland) に生まれ、シュヴァルトツヴァルトのキルヒツアルテン (Kirchzarten/Schwarzwald *BW*) に没した社会学者・民俗学者・教育者。牧師の息子で、はじめクルジュ=ナポカの大学に学び、次いでハレ、ベルリン、ボンの諸大学でゲルマニスティク・哲学・歴史学・社会学・民俗学・神学を学び、出身地域のドイツ語の地名の研究で学位を得た。ナチス期にはプロテスタント教会と連携したナチスの国境・国外ドイツ文化の担当機関に勤務した。戦後は1947-62年間はフライブルクでギュムナジウム教諭、次いでハイデルベルク教育大学教授を経て、1964年にハイデルベルク大学の社会学・政治学の正教授となり、1977年に定年となった。
- p. 297 **ハーバート・スペンサー** (Herbert Spencer 1820-1903) イングランド中部ダービー (Derby) に生まれ、同地方南東部ブライトン (Brighton) に没した社会学の先駆者。非国教徒の家に生まれ、叔父の経営する寄宿学校に学んで鉄道技師となり、傍ら著述にたずさわった。1843年に最初の著作『政府の適正領域』を刊行。1848年に経済誌『エコノミスト』誌の副編集長となった。1853年に叔父の遺産を相続したのを機に副編集長の職を辞し、在野の研究者として著述に専念した。自由主義と社会進化の概念を土台に、社会発展の解明に向けて多くの著作を残した。1870年代には一種のブームとなり、日本でも明治時代には広く読まれた。社会進化論の定礎者であり、『適者生存』(survival of the fittest) の造語者でもある。

ドイツ社会学の研究課題としてのフェルアイン（クラブ・組合）(1)

- p. 297 **アルベルト・シュフェレ** (Albert Schäffle 1831-1903) 南西ドイツのニュルティンゲン (Nürtingen *BW*) に生まれ、シュトゥットガルトに没した国民経済学者・社会学の先駆者。テュービンゲンのプロテスタント神学校に通ったが、バーデン地方の三月革命に加担したとして退学させられ、新聞編集者となった。1856年にテュービンゲン大学の国家学部で学位を得て、1860年に同大学の国民経済学の教授となった。1868年にウィーン大学の政治学の教授に転じ、1871年にはオーストリア帝国の商務・農業大臣として、ホーエンヴァルト首相と共に内閣を率いた。以後はシュトゥットガルトで著述に専念し、またその間1881-82年にドイツ帝国宰相ビスマルクの下で社会立法にたずさわった。国家学と経済政策（関税論など）の分野で多くの著作がある一方、社会民主主義には反対の立場をとった。
- p. 297 **ゲオルク・ジムメル** (Georg Simmel 1858-1918) ベルリンに生まれ、ストラスブールに没した社会学者。父母共にユダヤ人。ベルリン大学で歴史学・心理学・哲学を学び、1881年にカントを論じて哲学の分野で学位を得た。ベルリン大学の私講師、次いで貝外教授を経て、1914年ストラスブール大学で教授となった。この間、ハイデルベルク大学で、退職するマックス・ウェーバーの後任としてウェーバーにも推されたが、社会学への宮廷の不信から実現しないなど、開拓期の社会学の苦難をも経験した。初期には新カント派に近い視点に立ったが、後にベルグソンを独自に消化して形態社会学を発展させた。クラブ・組合の意味でのフェルアインを対象とする考察はほとんど見られないが、社交 (Geselligkeit) の概念を軸に人間関係の基本を問題にした。主要著作は邦訳されている。参照、清水幾太郎 (訳) 『社会学の根本問題 個人と社会』(岩波文庫1978)、居安正 (訳) 『社会学 社会文化の諸形式についての研究 (上) (下)』(白水社1994) その他。
- p. 297 **エミール・デュルケーム** (Émile Durkheim 1858-1917) 仏ロレーヌ地方ヴォージュ県エピナル (Épinal/Dép. Vosges) に生まれ、パリに没した社会学者。ユダヤ人で父親と祖父はラビであった。パリ高等師範学校に学び、1886年のドイツ留学を経て、1887年にボルドー大学の教授、1902年にパリのソルボンヌ大学の教育科学講座の教授となった。ボルドー時代に『社会分業論』(1893)、『社会学的方法の規準』(1895)、『自殺論』(1897)などが書かれた。後年の『宗教生活の原初形態』(1912)をも併せて、主要著作はほぼ邦訳されている。ここでの文脈と重なるのは『社会分業論』であるが、フェルアインに照応するアソシエーションが論じられるのではなく、主にギルドが取り上げられている。
- p. 297 **マックス・ウェーバー** (Max Weber 1854-1920) エルフルト (TH) に生れ、ミュンヘンに没した社会学者。フライブルク大学教授、ハイデルベルク大学教授。経済事象を宗教との関聯で解明を試みたほか、権力の類型学としてカリスマの概念を措定し、また学問的認識の方法論についても考察を行なった。ここでの文脈では、第一回社会学者大会で、『フェルアインの社会学』の必要性を説いて研究を方向付けたことが特筆される。その場合のウェーバーの重点は、現代の市民社会において政治的エリートが形成される仕組みを問うことにあり、支配の社会学との重なりが濃厚であった。
- p. 297 **集団の社会学** (Soziologie des Vereinswesens) こう訳されることが多い。1910年の「業務報告」ではボーリング・クラブが例に挙げられることからクラブ・組合が想定されているが、それにとどまらなると見られ、また社会学会が構想しウェーバーが素案を練った『社会科学綱要』のプランでは、フェルアインの社会学は《家族ならびに町村体、身分と階級、宗教教団》をも含むからである。ウェーバーは、政党もフェルアインの一種としており、それにはアレクシ・ド・トクヴィルがアメリカのアソシエーションに政党を入れていた先例がある。
- p. 301 **フランツ・クライン** (Franz Klein 1854-1926) ウィーンに生まれ没した法学者・政治家。父親は金銀細工師で、後に帝室質店の理事をつとめた。ウィーン大学で法学を学び、1978年に学位、1881年にオーストリア民事訴訟法とローマ法の両分野で教授資格を得た。

法務省に勤めて昇級を重ね、1906-08年間と1916年に法務大臣となった。第一次世界大戦後は、政界への進出は果たせなかったが、講和会議の担当者となるなどの活躍があり、また株式会社など企業組織についても理論家であった。

- p. 301 **アルフレート・ウェーバー** (Alfred Weber 1868-1958) エルフルト (TH) に生まれ、ハイデルベルクに没した社会学者・経済学者。マックス・ウェーバーの弟。ボン大学で考古学・美術史をたしなみ、チュービンゲ大学で法学を学んだ後、ベルリン大学でグスタフ・シュモラーの下で経済学に取り組んで、家内工業の研究で学位、次いで1900年に教授資格を得た。プラハ大学に赴任し、在職中の1906年にはフランツ・カフカの大学卒業試験口頭試問の試験官の一人であった。1907年にハイデルベルク大学教授となった。ナチス期には退職しており、戦後、復職した。文化社会学のバイオニアであった。指導を受けた学生にはエーリヒ・フロムやノルベルト・エリアスがいる。ここで言及されるハンス・シュタウディンガーの学位論文の指導教授であった。
- p. 301 **ハンス・シュタウディンガー** (Hans Staudinger 1889-1980) ライン河中流域ヴォルムス (Worms RP) に生まれ、ニューヨークに没した経済政策家・政治家・社会学者。ミュンヘン大学でゲルマニスティクに触れた後、ハイデルベルク大学で国民経済学を学び、ウェーバー兄弟の感化を受けた。アルフレート・ウェーバーの下で、「フェルアインの文化オーガニゼーションにおける個人とゲマインシャフト」(*Individuum und Gemeinschaft in der Kulturorganisation des Vereins*)の研究で1913年に学位を得た。第一次世界大戦への従軍と戦傷を挟んで官庁に勤め、ヴァイマル時代には中央省庁において産業政策と経営政策のエキスパートとして知られた。政治的には大学生のときに社会民主党に入党しており、1932年の総選挙にハムブルク地区から立候補して国会議員となったが、ナチ政権の成立からほどなく逮捕された。逃亡してベルギーとフランスを経てアメリカへ渡った。ニューヨークのニュースクール大学の経済学の教授となり、以後は研究活動と、学長の時期を含めて大学運営と学界運営に従事した。第二次世界大戦後はアメリカとドイツの重要な架け橋であった。父親はドイツで消費組合や生活協同組合の運動を牽引したフランツ・シュタウディンガー (Franz Staudinger 1849-1921)、兄はヘルマン・シュタウディンガー (1953年ノーベル化学賞)。
- p. 302 **フェルディナント・テンニェス** (Ferdinand Tönnies 1855-1936) ユトランド半島の西海岸ノルトフリースラントの小村オルデンヴォルト (Oldenswort SH) に生まれ、キール (Kiel SH) に没した社会学者。ストラスプール (在籍手続きはせず)、イエナ、ボン、ベルリンの諸大学において文献学・歴史学・哲学を学び、1877年にチュービンゲン大学で古典文献学の分野で学位を得、次いで1880年にキール大学でホップズの研究で教授資格を得た。1882年に同大学の私講師となり、後、1909年から社会学の教授となって1916年に定年退官となった。名誉教授であったが、1933年にナチスによってその資格を否定された。著者にあたるのは、比較的早い時期に書かれた『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』で、1887年に初版が刊行され、生前に8版 (1935年) まで数えた。そこでは、本編のテーマである《フェルアイン》は《社団・クラブ・組合》を指す語としては取り上げられておらず、一か所だけ広義の《結社》の意味で言及されるにすぎず (原注が挙げる第3篇 § 28)、またその究極は《国家》であるとされる。
- p. 303 **ヘルマン・シュマーレンバッハ** (Herman Schmalenbach 1885-1950) ライン河畔のハインザ都市ブレッカーフェルト (Breckerfeld NRW) に生まれ、バーゼルに没した哲学者・社会学者。イエナ・ベルリン・ミュンヘンの諸大学で哲学・歴史学・上古学を学び、特にゲオルク・ジムメルに私淑した。1910年にイエナ大学で哲学者ルードルフ・オンケン (1908年にノーベル文学賞) の下で学位を得た。1920年にゲッティンゲン大学で教授資格を得て、1923年に同大学で員外教授、1931年から没年までバーゼル大学の正教授であった。シュマー

ドイツ社会学の研究課題としてのフェルアイン（クラブ・組合）(1)

レンバッハは、社会学の分野では、《盟約Bund》の概念を導入したことで記憶される。ゲマインシャフトが家族に代表されるように《自然な》関係で、喪失の危機においてはじめて意識されるのに対して、自然的には本来関係のない人間のあいだで突然であっても結びつきが成り立つこと、たとえば友人関係がそうである、とされる。シュマーレンバッハはその説くところの《盟約》の意義を、1920年前後の青少年や大学生の同盟的な集合に基づいて提唱した。また自身も、ゲオルゲ・クライスに属していたことも経験的な背景であった。テンニェスは、自己の理論が敷衍されたこと嘉したが、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの二元性に含まれるともみなした。

- p. 303 **レオ・ヒルベラート** (Leo Hilberath 1903-67) ライン中流域アラウヴァイラー郡レマーゲン (Remagen RP) に生まれた社会学者。ケルン大学で社会学を学んだ。師の一人はレオポルト・フォン・ヴィーゼで、原注の文献はその下で作成された1929年の学位論文の刊本。ナチ政権によってケルン大学を追われたが、ナチスに接近してナチスの農業関係・労働関係の機関と関係を築いてコミュニティ研究をつづけた。戦後はアメリカ軍とSPDの支援を得た。実地調査によるコミュニティ研究の開拓者の一人であった。
- p. 303 **レオポルト・フォン・ヴィーゼ** (Leopold von Wiese 1876-1969) プロイセン領時代のシレジアのグラッツ (Glatz 現ポズナニ) に生まれ、ケルンに没した社会学者。ベルリン大学で経営学を学び、1902年に学位を得た。1908年にハノーファー工科大学の国家学の正教授、1915年にケルン商科大学の教授、1919年にケルン大学の社会学の教授となった。1921年に『ケルン社会科学四季報』(*Kölner Vierteljahreshefte für Sozialwissenschaften*) を創刊して主宰した。同誌は第二次世界大戦後『ケルン社会学・社会心理学誌』(*Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie* = KZfSS) と改称されて今日に至る。ゲオルク・ジムメルと共に形式社会学を確立させた。社会学の生成期にかかわり、戦後も権威であったことから、戦後は学界をまもるためにナチス=ドイツ期の社会学不在を説いた。
- p. 304 **新緑 (五月) 祭の乙女の競り落とし** (Maifehenversteigerung) 五月一日を中心とした新緑の祭り (Maifest) は多彩な習俗の結節点であるが、若い男性が乙女たちに順番に値段をつけ、最高値で競り落とした者がダンスの相手にする権利を得るなどの行事が古くから行われてきた。
- p. 304 **ニクラス・ルーマン** (Niklas Luhmann 1927-98) リューネブルク (Lüneburg NI) に生まれ、エルリングハウゼン (Oerlinghausen NRW) に没した社会学者。フライブルク大学とハーヴァード大学に学び、1966年にミュンスター大学で博士学位と教授資格を得た。1968年にビーレフェルト大学の社会学の教授となった。オートポイエーシスの概念を組み込んだ社会システム論で知られる。
- p. 305 **若者組合** (Jünglingsverein) 19世紀前半から半ばに、当初は主に職人の徒弟に教養を得る機会をあたえるためにプロテスタント教会とカトリック教会の両方で行われ、世紀の末には大きな潮流となった。
- p. 305 **キリスト教労働者組合** (christliche Arbeitervereine) 19世紀後半から20世紀初にはカトリック教会でもプロテスタント教会でも労働者へのケアと組織化が図られ様々な団体が作られた。それらの総称。
- p. 305 **鉄兜団** = 前線兵士同盟 (Stahlhelm, Bund der Frontsoldaten) ヴァイマル時代に退役軍人によって結成された在郷軍人組織で、政治活動もおこなった。
- p. 305 **人狼団** (Werwolf ヴェアヴォルフ) 第二次世界大戦末期にナチス=ドイツが占領地において軍の正規部隊を支援するために設けたゲリラを専門とする武装組織。
- p. 305 **赤色戦線戦士同盟** (Der Rote Frontkämpfer-Bund) ヴァイマル時代にドイツ共産党が設けていた準軍事組織。
- p. 305 **ナチス協会** (nationalsozialistischer Verein) ドイツのナチスへの支持と共闘を掲げて

- 1928年頃から特にオーストリア各地でつくられた団体。
- p.305 **大学同門会** (studentische Korporation) 大学の同窓会 (Studentenverbindung) の別称。学生同盟 (ブルシェンシャフト) のような政治的な活動団体の性格は薄い。
- p. 307 **フリッツ・ドイツマン** (Fritz Deutzmann 生 1892) ライン川下流域ユーリヒ (Jülich NRW) の国民学校の教員であった。ここで挙げられた文献の他、ゲマインシャフトの概念を教育のキーワードとして説いた著作が知られている。
- p. 308 **ヴォルフガング・ブローバイル** (Wolfgang Brobeil 1911-81) ストラスブールに生まれ、マインツに没したジャーナリスト・編集者。ベルリン大学とフランクフルト大学でゲルマニスティク・歴史学・美術史・社会学などを学び、1936年にフランクフルト大学で学位を得た。ここで挙げられるのはその刊本。その研究にあたっては、カール・マンハイムとノルベルト・エリアスの指導を得たとされる。1934年から南西ドイツ放送局に入り、戦争期には従軍記者をつとめた。戦後も南西ドイツ放送局・テレビ局で活動した。特にマインツのカーニヴァルの中継はそのレポーターで引退後もしばらく担当した。ジーヴェルトの本編の当時は西ドイツではよく知られたジャーナリストであった。
- p. 309 **ヘルマン・パウジンガー** (Hermann Bausinger 1926-L) シュヴァーベン地方アールン (Aalen BW) に生まれた民俗学者。テュービンゲン大学でゲルマニスティク・アングリシスティク・歴史学・民俗学を学び、1952年に「語り物の現在」を論じて同大学で学位、1959年に「科学技術世界のなかの民俗文化」で同じくテュービンゲン大学で教授資格を得た。1960年にテュービンゲン大学教授として民俗学科を主宰し、1992年に定年となった。戦後もなから折にふれて問題視されてきたナチズムに傾斜した民俗学のあり方に独自の視点で取り組み、それを方法論に活かして、1950年代末から民俗学の改革を主導し、日常研究のディシプリンを切り開いた。1950年代後半から民俗学の分野でのフェルアイン研究の重要性を説き、自らも日常研究の視点からフェルアインを多角的に論じ、特にスポーツ組合に関する論考が注目される。
- p. 309 **青少年運動** (Jugendbewegung) 1896年のワンダーフォーゲルの開始も指標の一つとされるドイツでの青少年教育運動。愛国と軍隊調の野外経験を含む共同生活・集団行動の訓練に重点がおかれた。広義では、同時代の国際的なキリスト教会の青少年教育運動であるボーイスカウト (ドイツではPfadfinderと呼ばれた) をも併せて解される。幾つかの潮流に分かれて運動が進み、一部ではナチスのヒトラー・ユーゲントの素地となったが、運動の指導者の中にはナチスに加担せず迫害された人々もいた。
- p. 309 **ハンス・F・K・ギュンター** (Hans Friedrich Karl Günther 1891-1968) フライブルク (i.Br.) に生まれ没した文筆家・人種論者。フライブルク大学でゲルマニスティクと言語学を学び、1914年に同大学で学位を得た。第一次世界大戦に志願兵として出征し、戦後は過激な人種論者として文筆を揮った。それは、ナチストとしての初期にあったヒムラーを感動させ (1924年頃)、さらに党首、ヒトラーはその著作を1928年のクリスマス・プレゼントに採用した。《人種のギュンター》(Rassengünther/Rasse-Günther/Rassepapst) の異名で知られ、ナチズムの人種観念に直接の影響があった。戦後の非ナチ化裁判では学術関係者の故であったろうが、《同調者》(Mitläufer) という軽めの分類ですまされ、第二次世界大戦後も人種論を改めなかった。
- p. 309 **グンター・イープゼン** (Gunther Ipsen 1899-1984) 塊インスブルックに生まれ、独タウヌス山地オーバーウルゼル (Oberursel/Taunus HE) に没した社会学者。ライプツィヒ大学で心理学を学び、1922年に学位、1925年に教授資格を得た。ライプツィヒで研究者歴を重ねて員外教授の後、1933年にケーニヒスベルク大学で心理学の正教授となった。並行して農業社会学を開拓した。1939年にウィーン大学の正教授として、当初は哲学、次いで心理学を担当したが、軍務に転身した。早くからヴァイマル体制への攻撃を行ない、ナチ

ドイツ社会学の研究課題としてのフェルアイン（クラブ・組合）(1)

ズム社会学の代表的な一人であった。戦後は職を追われたが、アルノルト・ゲーレンやヘルムート・シエルスキーなどの厚い人脈があり、ミュンスター大学で復権した。

解説(1) 翻訳紹介にあたって

本編は、ドイツの社会学者ハンス＝イェルク・ジューヴェルトの論考（直訳すると）「ドイツ社会学におけるフェルアイン（組合）組織のテーマ設定に向けて」の全訳である。訳出にあたってはタイトルを少し工夫した。書誌データは以下である。

Hans-Jörg Siewert, *Zur Thematisierung des Vereinswesens in der deutschen Soziologie*. In: Otto Dann (Hg.), *Vereinswesen und bürgerliche Gesellschaft in Deutschland*. München [R. Oldenbourg] 1984 (Historische Zeitschrift, Beihefte, Neue Folge, hrsg. von Theodor Schieder, 9), S. 151-180.

これからも知られるように、論集『ドイツにおける組合組織と市民社会』を構成する一篇である。ドイツの近代史家でケルン大学教授であったオットー・ダン（1937-2014）が編んだ《フェルアイン》に関するその一書の基本は歴史学で、18世紀末から20世紀までを時代に区切ってフェルアインの動向を取り上げている。主に歴史学者が担当しているが、そこに、社会学と民俗学からの寄稿が併せられ、その二編は当該分野の観点から時代を通した記述となっている。このうち民俗学からの概観は本誌の前号に訳出した。参照、アルブレヒト・レーマン「ドイツ社会とクラブ・組合——民俗学の視点から」愛知大学国際問題研究所『紀要』第154号（2019年）

なおドイツのフェルアイン（クラブ・組合）について言い添えれば、著しく特殊なものではなく、欧米の多くの国・地域で概ね共通した集団形成のドイツ語での呼称である。それゆえドイツの論者たちも《アソシエーションを》をフェルアインと同義ないしは包括的な概念として使っていることが多い。しかし西洋諸国の身近な社会的実態であるそうした集団については、日本では注目される度合いが意外に低いようである。誤解や思い込みも見受けられる。それもあって、本邦の集団形成との比較を射程に置いて

小文をつづっているが、並行して、このテーマについて研究史上の里程標と目される理論や概説の翻訳紹介をも進めている。振り返ると30年近く前に本誌に抄訳したバウジンガー等による『新しい移住団地』がその最初で、そこには《フェルアイン》が一章になっていた。参照、バウジンガー/ブラウン/シュヴェート「新しい移住団地——東ヨーロッパからのドイツ人引揚者等の西ドイツ社会への定着にかんするルートヴィヒ・ウーラント研究所による民俗学・社会学調査（抄訳・解説）」愛知大学国際問題研究所『紀要』第94・96・98・99号（1991-1993）所収

以来、折にふれて取り上げてきたテーマでもある。なお今回の論者の経歴や、フェルアインとその研究面の特徴などは二回続きの後半の解説にゆずりたい。

(S. K./10. Sep. 2019)